国際協力版「授業研究入門マニュアル」の開発（２）

研究代表者　桑山　尚司（留学生専門教育）
研究分担者　鈴木由美子（学習開発学講座）
木村　博一（初等カリキュラム開発講座）
山崎　敬人（初等カリキュラム開発講座）
竹下　俊治（自然システム教育学講座）
木下　博義（自然システム教育学講座）
小山　正孝（数学教育学講座）
影山　和也（数学教育学講座）
棚橋　健治（社会認識教育学講座）
草原　和博（社会認識教育学講座）
岡村美由規（社会認識教育学講座）
岩田昌太郎（健康スポーツ科学講座）
齊藤　一彦（健康スポーツ科学講座）
丸山　恭司（教育学講座）
吉田　成章（教育学講座）

Ⅰ　研究の背景と目的

教育分野での国際協力の重要性が言われる現在の国際社会において，教育の質改善の方法として授業研究が世界的に注目されている。広島大学教育学研究科も，国際的社会貢献として，ドミニカ共和国の教員養成に携わる大学教員を対象に，授業研究を中核とする支援を進めてきた。しかし，授業研究は日本の教師文化・学校文化を暗黙裏に前提としているため，日本の資料をそのまま翻訳して使用することには大きな困難が伴う。そこで，本研究では，諸外国において現地語に翻訳されて利用されることを想定し，日本の文化に大きく依存しない授業研究マニュアルの開発を行う。

Ⅱ　研究の概要

本年度は，昨年度までの研究成果（構成原理，内容，留意点に係わる提案）を踏まえ，授業研究マニュアル本体を開発した。その概要は，以下のとおりである。

１．マニュアルの特色

（１）教師教育者対象のマニュアルづくり

本マニュアルは，海外で授業研究を実施しようとする教師教育者を対象とした（その理念はⅢに示した本文参照）。海外での授業研究は，小・中・高等学校等の現職教員研修の手法として導入されていくことが多く，各国の教員養成課程を担う教師教育者を対象とする取り組みはこれまで十分ではなかった。こうした現状に対して，本マニュアルの対象を教師教育者とすることは大きな特色となった。

（２）国際版としての性格

マニュアルの開発にあたっては，できるだけ日本の授業研究における歴史性や社会文化

性を前提としない記述を心がけた（特にその骨格となる「ステップ及びキー・ポイント」部分）。また，用語や文章構造等で，翻訳を前提にした分かりやすさを執筆・編集方針とした。

（3）入門版としてのわかりやすさ

本マニュアルは，海外で初めて授業研究に触れる教師教育者にもわかりやすいものとして構想した。したがって，特に手順を記した「ステップ及びキー・ポイント」では，仲間づくりから説き起こし，平易な記述を心がけている。各ステップの「キー・ポイント」と「解説」は見開きとし，一瞥してわかりやすくなるようにした。日本のように多様な授業研究の場がなく，自分たちで始めようとする人がよく抱く疑問については，「Q&A」で重層的に回答するようにした。各ステップの要所に配した「コラム」には，少しずつ経験を積んでいく人の参考になるように，詳細な解説や事例を示した。そして，冒頭の「なぜ教師教育者に授業研究が必要なのか」で根底にある理念を示し，授業研究の指針となるようにした。次の節に，構成と内容の例を示す。

2．マニュアルの構成

本マニュアルの構成と内容一覧を執筆者名とともに表１に，各ステップのキー・ポイントを表２に示す。ステップ１を入り口として，「ステップ２→ステップ３及び４→ステップ５→ステップ２→…」とサイクルをなして授業を改善し，ステップ６で成果の共有や発信を図るようにイメージしてある。マニュアル全体の日本語版プロトタイプは添付資料を参照してほしい。

表１　マニュアルの構成

構成	内容	執筆者
1. 構成と見方		岡村美由規
2. なぜ教師教育者に授業研究が必要なのか	学び合う教師の輪を広めていくために	木村博一
	授業を科学的に研究していくために	棚橋健治
3. 授業研究の手順	（ステップ－キー・ポイント構造）	草原和博・吉田成章・岡村美由規
ステップ1：授業研究の組織をつくる	解説：授業研究の目的	木村博一
	同僚と協働することの大切さ	丸山恭司
	「技」，「思想・理念」とは	草原和博
ステップ2：事前協議会を行う	解説：研究授業とは何か	小山正孝
	授業プランとは何か，どうつくるか	鈴木由美子
	事前協議会の運営の仕方	木下博義
	コラム：授業と授業研究の構造	桑山尚司
ステップ3：研究授業を実施し，観察する	解説：授業を観察する視点と方法	山崎敬人
	授業観察記録のとりかた	影山和也
	コラム：観察意図と観察視点	吉田成章
	授業観察記録のとり方	岩田昌太郎
ステップ4：事後協議会を行う	解説：事後協議会の目的と展開	岡村美由規
	振り返り（省察）とは	齊藤一彦
	司会者の役割	竹下俊治
	コラム：コメントするのは難しい！	山崎敬人
	多様な事後協議会のあり方と司会者の役割	竹下俊治
ステップ5：自分の授業を見直し，改善していく	解説：普段の授業の省察	影山和也
ステップ6：授業研究の仲間を増やし，拡げる	解説：授業研究報告書を作成する	齊藤一彦
	研究・実践論文を作成する	小山正孝
	コラム：授業研究の時間をどうつくるか？	木下博義
4. おわりに		丸山恭司・桑山尚司
5. Q&A		棚橋健治・鈴木由美子・岡村美由規

表２　各ステップのキー・ポイント　（草原和博*・吉田成章*・岡村美由規*）

ステップ1　授業研究の組織をつくる	
①	授業で悩んでいる―最初は気軽に話ができる―仲間を探そう。
②	授業で尊敬できる―できたら上手いと噂の―仲間を探そう。
③	①と②の仲間でスタディ・グループをつくろう。目的は，もっといい授業ができることで，「自分」も「学生・生徒」も成長するために。
④	まずは，思いついたときに，仲間で互いに授業を見せ合おう。
⑤	機が熟したら，日時や曜日を決めて定期的に授業を見せ合おう。
⑥	授業を見たら，「技」を盗もう。最初はこっそりと。次第に声を出して，盗んだモノを告白しよう。
⑦	技だけではなく，そのバックにある「思想・理念」(なぜそういうことをしているのか)も考えよう。
⑧	受け取るだけでなく，フィードバックもしてあげよう。相手が喜ぶように。互恵的な関係を築こう。
ステップ2　事前協議会を行う	
①	授業を見せ合う関係ができたら，オフィシャルな研究授業を決行する準備をしよう。
②	最初の授業者を決めよう。組織の長やグループのまとめ役が率先して手を挙げよう。
③	研究授業の前に，事前協議会の機会を設けよう。司会者は授業者自身でも可能だし，仲間内のローテーションで決めてもよい。
④	授業プランを作ろう。そのときは普段できないことに挑戦してみよう。
⑤	事前協議会では，授業プランを説明しよう。
⑥	授業プランは，印刷物やスライドで記録に残して仲間と共有しよう。
⑦	授業者は，プランの説明に際して授業の目標だけでなく，研究上の意図も強調しよう。
⑧	観察者は，授業の目標を達成する，もっと効果的な代案を思いついたら，助言してあげよう。 批判は，いつも助言とセットでね。
ステップ3　研究授業を実施し，観察する	
①	グループのまとめ役は，あらかじめ研究授業の日時，場所，意図を同僚に広報しよう。 組織の長にも声をかけるといいよ。
②	授業者は，リラックスして，普段よりも早めに教室に入ろう。受講学生にはあらかじめ授業研究の意図を伝えておこう。
③	観察者は，かならず紙とペンを持っていこう。
④	観察者は，事前協議会で授業者が強調した授業の目標と研究上の意図を思い出し，授業を注意深く観察しよう。
⑤	観察者は，たえず授業者に敬意を払おう。
⑥	記録は，細かく具体的にとろう(誰が，どの場面で，何をした・何を言ったなど)。
⑦	記録は，授業プランを参照しながらとろう。
⑧	記録には，カメラやビデオも活用しよう。
ステップ4　事後協議会を行う	
①	研究授業が終わったら，早めに事後協議会を開催しよう。
②	事後協議会の成否は司会者しだい。司会者は，はじめのうちは，仲間内で信頼・信望の篤い人にお願いするのもよいアイディア。
③	授業者は，観察者にむけて，あらためて授業の目標と研究上の意図を説明しよう。
④	授業者は，まず授業の目標の達成という視点から，自らの実践を振り返ろう。
⑤	観察者は，初めから授業を否定するのではなく，授業の目標の達成という視点から成果や課題を指摘しよう。
⑥	成果や課題を指摘するときは，授業記録に即して具体的な根拠(エビデンス)を示して述べよう。
⑦	課題を指摘するときは，できれば代案の提案とセットでね。
⑧	代案を提案するときは，まずは授業者の目標に寄り添って。次により高次な目標を目指して。
⑨	課題と代案を確認・共有できたら，次に，研究上の意図からみた研究授業の成果や意義を議論しよう。
⑩	最後に司会者は，事後協議会での議論が私たちの授業改善に示唆する点を，3つ程度にまとめよう。
ステップ5　自分の授業を見直し，改善していく	
①	観察者と授業者は，事後協議会の成果を踏まえて，それぞれ個人で普段の授業を省察しよう。
②	明日の授業に活かせる「技」を見つけて，実際にトライしてみよう。
③	半年以内に身につけたい高度な「技」を見つけて，箇条書きしておこう。
④	一年以内に取り入れたい斬新な「思想・理念」を見つけて，メモしておこう。
⑤	実際にトライした成果やこれからトライしたいことを，仲間に伝えよう。
⑥	仲間に伝えたことをメモに残しておこう。SNS等を使って，発信しよう。
ステップ6　授業研究の仲間を増やし，拡げる	
①	授業改善の成果は積極的に宣伝しよう。そのために研究成果を印刷物にまとめよう。印刷しなくてもウェブ上にアップして広く読んでもらおう。
②	口頭や印刷物やSNS等で授業改善の喜びを他者に伝え，授業研究の仲間を増やそう。
③	取り組みの成果を論文にして発表するのもいいアイディア。

３．マニュアルの内容例

本報告書では，手順を示すステップの一部（ステップ４）のみを内容例として挙げる。全体は，添付資料を参照のこと。

ステップ４の見開きページ（１）　（解説上：岡村美由規*，同下：齊藤一彦*）

ステップ4　事後協議会を行う

キー・ポイント

① 研究授業が終わったら，早めに事後協議会を開催しよう。

② 事後協議会の成否は司会者しだい。司会者は，はじめのうちは，仲間内で信頼・信望の篤い人にお願いするのも良いアイディア。

③ 授業者は，観察者にむけて，あらためて授業の目標と研究上の意図を説明しよう。

④ 授業者は，まず授業の目標の達成という視点から，自らの実践を振り返ろう。

授業の良かった点や改善点を分類する：KJ 法

解説　*事後協議会の目的と展開*

事後協議会の目的は，授業者の授業をより改善する，観察者が自身の授業改善に示唆を得る，ひいては各自の授業改善を通じて学生の資質能力を向上させる，の３点である。協議会では研究授業をより改善するために，議論を通じ授業者・観察者が共に知恵を絞ることを目指す。その展開の基本は次の順番になる。

① 授業で起こった事実を授業者と観察者間で確認する（キー・ポイント３～６）。

② 授業者が設定した授業の目的に基づいて，授業改善の仕方を考える（同７，８）。

③ 観察者の問題関心に基づいて，授業改善の仕方を考える（同７，８）。

なお、研究授業の目的に応じて次を加える。

④ 研究のビジョンに基づいて，研究授業からの示唆を確認・共有する（同９，10）。

解説　*振り返り（省察）とは*

授業者は学習者の授業中の行動，発言内容，提出物などから，学びの状態を確認しながら授業の目標が達成できたかどうか振り返ることが必要である。さらに，授業を撮影した動画を見たり，観察者と協議を行う中で，自身の授業を客観視し，授業の問題点の原因や解決方法を探ることが重要である。また観察者も，授業者の授業，協議会などから必然的に自身の授業実践を振り返ることになる。こうした流れの中で，授業をさらに改善する方法を相互に提案しあうことが望ましい。

ステップ４の見開きページ（２）　（解説：竹下俊治*）

⑤ 観察者は，初めから授業を否定するのではなく，授業の目標の達成という視点から成果や課題を指摘しよう。

⑥ 成果や課題を指摘するときは，授業記録に即して具体的な根拠（エビデンス）を示して述べよう。

⑦ 課題を指摘するときは，できれば代案の提案とセットでね。

⑧ 代案を提案するときは，まずは授業者の目標に寄り添って。次により高次な目標を目指して。

⑨ 課題と代案が確認・共有できたら，次に，研究上の意図からみた研究授業の成果や意義を議論しよう。

⑩ 最後に司会者は，事後協議会での議論が私たちの授業改善に示唆する点を，3つ程度にまとめよう。

授業の時系列に即した表を活用しての協議の様子

解説 *司会者の役割*

協議会の進行を担う司会者の役割は，とても重要である。司会者は単なるタイムキーパーではない。協議会では，時間配分に加えて議論の方向性を決めるのは司会者であり，授業者自身の振り返り，観察者からのコメントなど，それぞれの場面で参加者から意見を引き出し，内容の濃い議論をさせ，そしてその成果を授業者や観察者に分かりやすい形で還元する，これらの全てが司会者の力にかかっているといっても過言ではない。

協議会は，授業者や観察者にとって非常に緊張する場面である。これを成功させるには，司会者はまず，協議会を互いに何でも言い合える和やかな雰囲気にすることを心がける必要がある。それには，協議会の始めに司会者がジョークを言うのも一つの方法であろう。また司会者は，観察者のコメントに，授業の良かった点と改善点の両方を求めることを忘れてはならない。授業者と観察者が互いに敬意をはらい，相手を傷つけたり言い争いになったりしないよう，要所要所で適宜フォローをする必要もある。授業者の授業に対する姿勢や工夫を観察者に理解させたり，授業の良かった点について，授業者に着想の経緯を説明してもらったり，あるいは観察者に，どうしたらそのような発想ができるのかを考えさせることも，議論の進め方としては有効である。

コラム　コメントするのは難しい！～議論の作法

授業研究の事後協議会は，より良い授業づくりと授業実践の創造を目指し，授業研究に参加した者が協働して学び合う場である。この認識を事後協議会の参加者がしっかりと共有して初めて，協議会でのコメントが建設的な意味を持ち，授業研究が有意義なものとなる。しかし，協議会でコメントしたり議論したりすることは，よく考えてみると「言うは易く行うは難し」である。

まず，授業者が構想・実践した授業には，授業の改善や新たな授業の創造につながる数多くの手がかりが存在する。それらの中から，授業の成果や課題の本質に迫る上で欠かすことのできないポイントとなるものを見出し，コメントしていくことが重要である。そのポイントをつかみ，具体的な事実や情報や考察などを交えながら議論していくことによって，授業実践を客観的，多面的，総合的に理解したり，解釈したり，より良い授業づくりや授業実践を探ったりしていくことが可能となる。

一方で，授業者は，授業目標の達成を目指し，刻々と展開していく授業の実際に身を置き，その時・その場・その状況で様々な判断や意思決定を行い，授業を実践していかなければならない。観察者であれば，授業中に，ある場面の指導の在り方について，時間の経過を気にすることなく，じっくりと思考をめぐらせることができる。しかし，授業者にはそれは許されない。そのような条件の中で授業者が行った判断や意思決定とその背景や根拠，授業者の思いや考え，授業者が見出した課題などは，授業者による省察において大切な内容であり，事後協議会でも重要な意味を持つ。そうした授業者の省察をしっかりと受け止め，理解し，共有していくことは，授業に関する学び合いのために授業を公開してくれたことに対する授業者への感謝と敬意を表するという意味でも，コメントする者に求められる。

さて，より良い授業の構想・実践の創造を目指して，授業の成果や課題，さらには課題の改善策や代替案を考え，検討していくことが，事後協議会の要である。その際，授業の目標が変われば授業そのものが変わることになるのだから，協議会でのコメントは授業者の設定していた目標や協議会における協議の柱に即して行うことが基本である。しかし，協議会の参加者全員がまったく同じ授業観や教授知識などを持っているということはあり得ないので，授業プランや実践された授業に対しては様々な見方や考えが生じうる。それでも，この基本を外してはならない。さらに，授業プランと実際に実践された授業との齟齬をただ単にチェックするだけのコメントでは，授業の改善には結びつきにくい。授業プラン通りに授業が実践されなかった場合でも，授業プランはあくまで「プラン」である。したがって，そのような場合は，授業者がどのような考えや思いで当初のプランとは異なる指導を行うことにしたのかといったことなどを，授業者に尋ねたり確認したりした上で，コメントすることが大切である。

その上で，授業者の授業構想や具体的な指導はどのような点で効果的であったのか，どのような点に課題があったのかについて検討していく。また，課題があったのであれば，どのような改善策や代替案がありうるのかについても検討していく。そこでは，参加者それぞれが，自分が持っている教授や学習に関する理論的，経験的な知識を総動員しながら，考え，意見を出し合い，共有し，理解を深めていくことが求められる。その際，実践された授業での授業者の指導や手立て，学習者の言動や活動などに係わる具体的な事実を踏まえながら，建設的に考え，コメントし，議論していくように努めたい。そうした検討を通して，当初の授業プランで設定されていた目標を越えた，より高次の目標設定の可能性（学習者の学びの可能性）が見出されたり，新たな授業開発に繋がるようなアイデアが考案されたりしていく場合がある。こうなると，協議会の成果は一段と大きなものとなる。

このような実り多い授業研究や協議会の実現を可能にする要件は，何だろうか。それは，何といっても，まずは参加者それぞれが授業づくりや授業実践について何かを学びたい，より良い授業を創造していきたい，自分の授業力量を高めたい，といった意志や意欲を持つことである。そして，その意味では常に参加者全員が「当事者」として授業研究に係わり，他者のコメントにも謙虚に耳を傾けながら，自分自身の授業観や教授知識などを省察し続けることである。

このように考えてくると，協議会でコメントしたり議論したりするということには，授業を観察する力も含め，それ相応の能力や見識，作法や態度，意識や意欲が求められることがわかる。それ故に「言うは易く行うは難し」である。しかし同時に，そうであるからこそ，これは，絶えず向上させていきたい教師の大切な力量の一つであると理解しておきたい。まずは一歩を踏み出してみよう。そして，その一歩から学んでいこう。

コラム　多様な事後協議会のあり方と司会者の役割

協議会は，授業研究のテーマ，司会者の進行法，参加者の技量などにより様々な形式をとるが，大きく二つのスタイルに分けることができる。一つは，授業者とフロアの参加者が対面して質疑応答や議論を行う形式で進めるもの，もう一つは，フロアの参加者がグループに分かれて，提示されたテーマに沿ってグループ内で協議した後，全体で協議内容を共有するものである。前者は，議論の進行が全体で共有しやすい一方，全員の意見を協議会に反映させにくいこともある。後者は各グループが「ミニ協議会」であり，そこでは自由に意見を交換することもあるし，表や付箋を使って意見を集約していく，いわばワークショップ的なものとなることもある。これは全員が議論に参加しやすいが，グループによって議論の内容が異なる場合があるため，グループワークの間は，司会者は各グループを回りながら内容を把握したり，議論が進んでいないようであれば助言を与えたりする必要がある。協議会では，これらのスタイルのどちらか一方だけで進めることに固執するのではなく，必要に応じて組み合わせて行うのが望ましい。

協議会の時間は限られている。したがって，司会者が論点を整理して示し，それについて議論するのが一般的である。議論の糸口を提供したり収束させたりすることで，効率的かつ効果的な協議会となる。議論を深めるには，司会者の主導により協議会に方向性を持たせ，それを維持することが特に重要である。参加者と方向性を確認し合いながら進め，議論の方向性がずれてきたら早い段階で修正する必要がある。しかし協議会を進める中で，より議論が深まりそうな方向性が新たに見つかった場合，そちらへ議論を誘導することも大切である。たとえば，ある特定の改善点に着目し，それに対する多様な改善策をフロアから引き出し，さらにそれら改善策を論点に議論を進めて行くような場合である。司会者の臨機応変な対応により，一貫したテーマを持たせつつ，協議会を多様な議論の場とすることができる。議論をまとめる際は，論点を幾つかのカテゴリーに大別した上で，出された意見を引用しながら要約すると，わかりやすく，授業者や観察者にも，その内容がよく伝わるであろう。

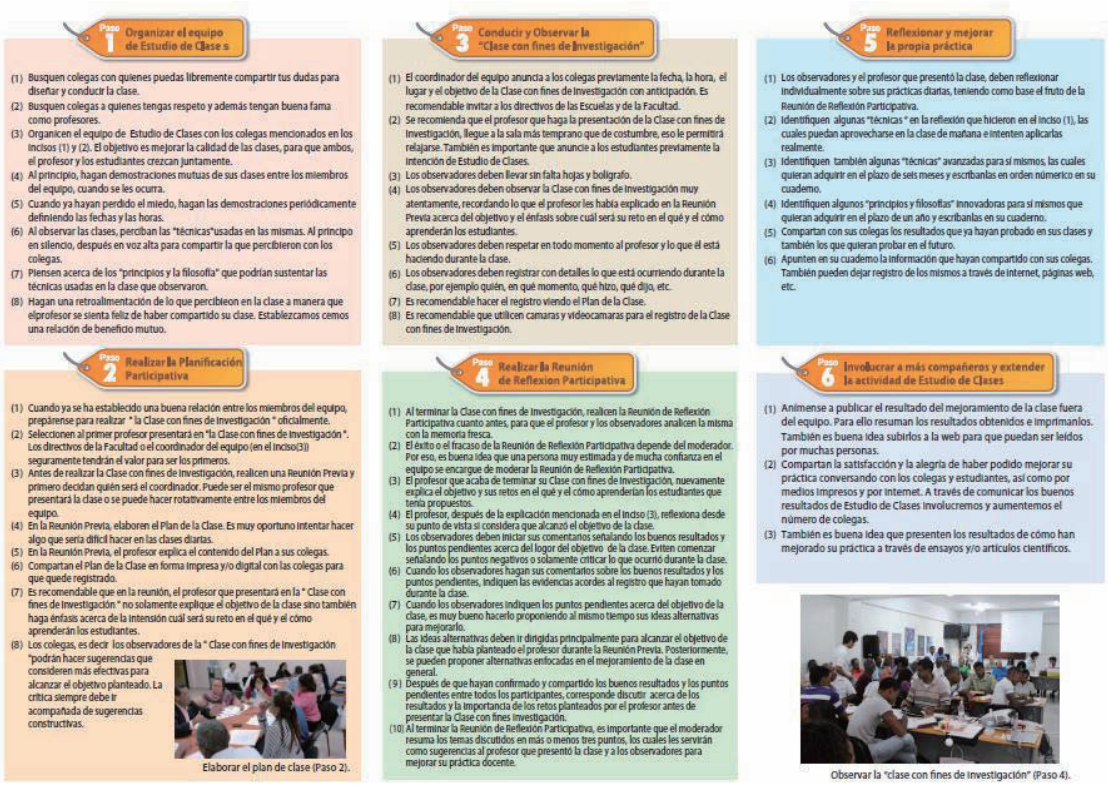
協議会における司会者の主要な役割は，授業を題材とした協議会の論点について参加者全員に理解させること，協議会の方向性を制御しながら参加者から多くの発言を引き出すこと，そして参加者全員に協議会の成果を共有させることである。したがって協議会では，観察者を通じて授業者に何を伝えるか，また，授業者を通じて観察者に何を伝えるか，について司会者自信が明確な意図を持っておかなくてはならない。そのためには，司会者は授業のカリキュラムにおける位置付け，授業者の意図や工夫について事前に把握しておくべきである。つまり司会者には，授業内容や教材，授業の方法についての理解が求められ，同様な内容の授業の先行事例に関する知識も必要とされる。これらが，協議会の進め方や議論の掘り下げ方のヒントにもなる。協議会そのものは授業者の改善点の指摘だけに終始するものではない。授業者の改善点は，そのまま各自の授業を振り返る視点にもなり，参加者の意見や授業者の良い点に気づかせ，それを全員で共有することで各自の授業の改善に役立てられるようなものでなくてはならない。

司会者は，可能であれば授業研究の経験者が望ましい。それは，授業者，観察者双方の立場を理解しているからである。司会者を授業研究のメンバーで交代して担当するのも良い。普段から意見交換できる仲間であれば，司会者は比較的容易に協議会を進行できるであろう。ただし，協議会のときには適度な緊張感があった方が良い。「親しき中にも礼儀あり」という日本のことわざがあるように，司会者には，リラックスした雰囲気と緊張感のバランスを取りながら協議会を進めることが求められる。経験を積んだ司会者は，授業者や観察者の力を読み取る観察力と分析力を持っている。授業の間では，授業計画と授業実践の一貫性，授業の目標と内容の整合性，授業の方法や教材の適切性など，授業に対する多様な視点からの分析（これらは観察者にも求められるが），そして協議会では，発言内容の理解に加え，観察者の発言が授業を分析的に観察した結果のものかどうかの判断を行い，協議会の進行に生かしているのである。

Ⅲ　成果の発信と今後の課題

現在，ドミニカ共和国における授業研究は，中核となる大学教員により主体的に行われている。他方，組織的な取り組みは予算源の確保のために過渡期にあるが，同学部の全学科で授業研究を実施したいとの意向が示されている。これに対応するため，本マニュアルで授業研究の手順を示す「ステップ及びキー・ポイント」は，スペイン語版リーフレットとして印刷され，2015 年２月に配布された（図１）。

マニュアル全文は英語等に翻訳され，国際版として広島大学大学院教育学研究科のホームページ上（www.hiroshima-u.ac.jp/ed/tokusyoku/p_p0kepi.html 等で検討中）にアップされる予定である。本マニュアルの教師教育者向け・国際版・入門版としての妥当性については，今後も国際的な実践からの検証が必要であり，適宜，そのバージョンを改編していく。また，本マニュアルを参考にして，各国で独自のマニュアルが作成されることがあれば，うれしい限りである。



Paso 1 Organizar el equipo de Estudio de Clase s

(1) Busquen colegas con quienes puedas libremente compartir tus dudas para diseñar y conducir la clase.
(2) Busquen colegas a quienes tengas respeto y además tengan buena fama como profesores.
(3) Organicen el equipo de Estudio de Clases con los colegas mencionados en los incisos (1) y (2). El objetivo es mejorar la calidad de las clases, para que ambos, el profesor y los estudiantes crezcan juntamente.
(4) Al principio, hagan demostraciones mutuas de sus clases entre los miembros del equipo, cuando se les ocurra.
(5) Cuando ya hayan perdido el miedo, hagan las demostraciones periódicamente definiendo las fechas y las horas.
(6) Al observar las clases, perciban las "técnicas"usadas en las mismas. Al principio en silencio, después en voz alta para compartir la que percibieron con los colegas.
(7) Piensen acerca de los "principios y la filosofía" que podrían sustentar las técnicas usadas en la clase que observaron.
(8) Hagan una retroalimentación de lo que percibieon en la clase a manera que elprofesor se sienta feliz de haber compartido su clase. Establezcamos cemos una relación de beneficio mutuo.

Paso 2 Realizar la Planificación Participativa

(1) Cuando ya se ha establecido una buena relación entre los miembros del equipo, prepárense para realizar " la Clase con fines de Investigación " oficialmente.
(2) Seleccionen al primer profesor presentará en "la Clase con fines de Investigación ". Los directivos de la Facultad o el coordinador del equipo (en el Inciso(3)) seguramente tendrán el valor para ser los primeros.
(3) Antes de realizar la Clase con fines de Investigación, realicen una Reunión Previa y primero decidan quién será el coordinador. Puede ser el mismo profesor que presentará la clase o se puede hacer rotativamente entre los miembros del equipo.
(4) En la Reunión Previa, elaboren el Plan de la Clase. Es muy oportuno intentar hacer algo que sería difícil hacer en las clases diartas.
(5) En la Reunión Previa, el profesor explica el contenido del Plan a sus colegas.
(6) Compartan el Plan de la Clase en forma impresa y/o digital con las colegas para que quede registrado.
(7) Es recomendable que en la reunión, el profesor que presentará en la " Clase con fines de Investigación " no solamente explique el objetivo de la clase sino también haga énfasis acerca de la intensión cuál será su reto en el qué y el cómo aprenderán los estudiantes.
(8) Los colegas, es decir los observadores de la " Clase con fines de Investigación "podrán hacer sugerencias que consideren más efectivas para alcanzar el objetivo planteado. La crítica siempre debe ir acompañada de sugerencias constructivas.

Elaborar el plan de clase (Paso 2).

Paso 3 Conducir y Observar la "Clase con fines de Investigación"

(1) El coordinador del equipo anuncia a los colegas previamente la fecha, la hora, el lugar y el objetivo de la Clase con fines de Investigación con anticipación. Es recomendable invitar a los directivos de las Escuelas y de la Facultad.
(2) Se recomienda que el profesor que haga la presentación de la Clase con fines de Investigación, llegue a la sala más temprano que de costumbre, eso le permitirá relajarse. También es importante que anuncie a los estudiantes previamente la intención de Estudio de Clases.
(3) Los observadores deben llevar sin falta hojas y boligrafo.
(4) Los observadores deben observar la Clase con fines de Investigación muy atentamente, recordando lo que el profesor les había explicado en la Reunión Previa acerca del objetivo y el énfasis sobre cuál será su reto en el qué y el cómo aprenderán los estudiantes.
(5) Los observadores deben respetar en todo momento al profesor y lo que él está haciendo durante la clase.
(6) Los observadores deben registrar con detalles lo que está ocurriendo durante la clase, por ejemplo quién, en qué momento, qué hizo, qué dijo, etc.
(7) Es recomendable hacer el registro viendo el Plan de la Clase.
(8) Es recomendable que utilicen camaras y videocamaras para el registro de la Clase con fines de Investigación.

Paso 4 Realizar la Reunión de Reflexion Participativa

(1) Al terminar la Clase con fines de Investigación, realicen la Reunión de Reflexión Participativa cuanto antes, para que el profesor y los observadores analicen la misma con la memoria fresca.
(2) El exito o el fracaso de la Reunión de Reflexión Participativa depende del moderador. Por eso, es buena idea que una persona muy estimada y de mucha confianza en el equipo se encargue de moderar la Reunión de Reflexión Participativa.
(3) El profesor que acaba de terminar su Clase con fines de Investigación, nuevamente explica el objetivo y sus retos en el qué y el cómo aprenderían los estudiantes que tenía propuestos.
(4) El profesor, después de la expilicación mencionada en el Inciso (3), reflexiona desde su punto de vista si considera que alcanzó el objetivo de la clase.
(5) Los observadores deben iniciar sus comentarios señalando los buenos resultados y los puntos pendientes acerca del logor del objetivo de la clase. Eviten comenzar señalando los puntos negativos o solamente criticar lo que ocurrió durante la clase.
(6) Cuando los observadores hagan sus comentarios sobre los buenos resultados y los puntos pendientes, indiquen las evidencias acordes al registro que hayan tomado durante la clase.
(7) Cuando los observadores indiquen los puntos pendientes acerca del objetivo de la clase, es muy bueno hacerlo proponiendo al mismo tiempo sus ideas alternativas para mejorarlo.
(8) Las ideas alternativas deben ir dirigidas principalmente para alcanzar el objetivo de la clase que había planteado el profesor durante la Reunión Previa. Posteriormente, se pueden proponer alternativas enfocadas en el mejoramiento de la clase en general.
(9) Después de que hayan confirmado y compartido los buenos resultados y los puntos pendientes entre todos los participantes, corresponde discutir acerca de los resultados y la importancia de los retos planteados por el profesor antes de presentar la Clase con fines investigación.
(10) Al terminar la Reunión de Reflexión Participativa, es importante que el moderador resuma los temas discutidos en más o menos tres puntos, los cuales les servirán como sugerencias al profesor que presentó la clase y a los observadores para mejorar su práctica docente.

Paso 5 Reflexionar y mejorar la propia práctica

(1) Los observadores y el profesor que presentó la clase, deben reflexionar individualmente sobre sus prácticas diartas, teniendo como base el fruto de la Reunión de Reflexión Participativa.
(2) Identifiquen algunas "técnicas " en la reflexión que hicieron en el Inciso (1), las cuales puedan aprovecharse en la clase de mañana e intenten aplicarlas realmente.
(3) Identifiquen también algunas "técnicas" avanzadas para sí mismos, las cuales quieran adquirir en el plazo de seis meses y escríbanlas en orden número en su cuaderno.
(4) Identifiquen algunos "principios y filosofías" innovadoras para sí mismos que quieran adquirir en el plazo de un año y escríbanlas en su cuaderno.
(5) Compartan con sus colegas los resultados que ya hayan probado en sus clases y también los que quieran probar en el futuro.
(6) Apunten en su cuaderno la información que hayan compartido con sus colegas. También pueden dejar registro de los mismos a través de internet, páginas web, etc.

Paso 6 Involucrar a más compañeros y extender la actividad de Estudio de Clases

(1) Animense a publicar el resultado del mejoramiento de la clase fuera del equipo. Para ello resuman los resultados obtenidos e imprimanlos. También es buena idea subirlos a la web para que puedan ser leídos por muchas personas.
(2) Compartan la satisfacción y la alegría de haber podido mejorar su práctica conversando con los colegas y estudiantes, así como por medios impresos y por internet. A través de comunicar los buenos resultados de Estudio de Clases involucremos y aumentemos el número de colegas.
(3) También es buena idea que presenten los resultados de cómo han mejorado su práctica a través de ensayos y/o artículos científicos.

Observar la "clase con fines de Investigación" (Paso 4).

図１　スペイン語版「ステップ及びキー・ポイント」（翻訳：岡村美由規*）

授業研究は日本の教師文化・学校文化を暗黙裏に前提としている。実際のところ，授業や授業研究に対する見方や考え方は，本マニュアルの執筆者間でも異なる。本マニュアルの教師教育者向け・国際版・入門版としての妥当性に対する問いは，各国の教師文化や個人の教師としての矜持を貫いて，共鳴を呼び起こしうる授業研究の本質を探究するということでもある。他方，海外で日本の教師教育者が授業研究について語る際には，自らの思いを込め，血のかよった生身の言葉でこそ伝わる本質もある。ある意味，本マニュアルは常に不十分である。その不十分さは，授業研究においては多様性こそが力であることや，海外における授業研究の可能性を示しているともいえるだろう。　　（桑山尚司*）